

第4回 長良川河口堰の更なる弾力的な運用に関するモニタリング部会 議事要旨

1. 日時 : 平成 24 年 10 月 29 日 15:00 ~ 17:00
2. 場所 : レセプションハウス名古屋通信会館(6階 葵の間)
3. 出席者 : 松尾部会長、石田委員、関口委員、藤田委員
4. 議事要旨

【総括】

平成 24 年度のフラッシュ操作のこれまでの調査結果について報告し、調査において生じた課題、今後の調査計画策定について意見をいただいた。

なお、各委員から出された主な意見は以下の通り。

1) 調査結果及び今後の調査方針について

- ・調査計画にある鉛直分布の結果も示すこと。鉛直分布データも用いてアンダーフローとオーバーフローの違い等を整理すること。
- ・フラッシュ放流では、浮泥のフラッシュアウトや植物プランクトンの増殖抑制効果などの問題も重要である。洪水時はフラッシュアウトするため影響が大きい。直前の洪水のフラッシュの効果を取り除くようなサンプリングが必要。
- ・水質保全上の課題について、フラッシュ操作をどう位置づけていくか、水質と生物の生息環境の改善に向けて何をしていくべきか整理する。
- ・フラッシュ操作の効果をみる場合も、必ずクロロフィルを指標として押さえておくべき。操作の違いによるクロロフィルの変化をとらえるように検討を行う。
- ・半年間の時系列データに、いつどのような調査を実施したかを示すこと。
- ・フラッシュ放流を一部のゲートで行うと、ゲート両側では浮泥を呼び込む問題がある。水質保全上の課題に対し、どのような効果があるかという観点で、よりよい方法を検討する。全門放流する場合、全容をとらえられる調査地点の検討が必要と思われる。
- ・浮泥の調査については、様々な方法があるのでより適切な方法を検討されたい。
- ・堰上流の流動状況について、空間スケールも考慮して整理をしてほしい。
- ・同じ流速測定装置を使用して、観測不感帯部分のデータをとろうと思うのであれば、センサーを 4 m 程度沈めて測定すればよい。
- ・ORP や生物に対するゲート操作全般の効果を説明するためには、データを蓄積して、統計解析を行う必要がある。これまでの調査結果を含めて整理を行う。

—以上—